

◎時代認識の違い

当時、分割民営化攻撃をいっただうとらえるかという背景には、明らかにこの時代をどう見るかという時代認識の違いがあった。

民営化攻撃に対する時代認識の違い

動労革マル	「冬の時代」論 冬の時代に闘うなんて労働者階級の闘いに敵対する行為だ。
日共・革同	闘いを放棄 これに立ち向かったら戦後のレッドパージのような攻撃にさらされる。
国労	たこつぼに入って嵐が過ぎるのを待つ これだけ攻撃が激しい時代だからたこつぼに入るしかない。
動労千葉	チャンスの時代がきた！ 支配階級が危機の時代にはわれわれの闘いによって敵をゆるがすこともできる。労働者側から見ればチャンスの時代だ。

敵の危機にかられた攻撃を「冬の時代」と考えて敵の陣営に加わるのか
「これに逆らったら大変だ」と考えてたこつぼに入るのか

労働者階級にとっての**チャンス**だととらえるのか
⇒敵の矛盾点があることを見てとれるかどうかということ

◎展望をもって明るく闘う

今もこんな情勢の中で

「なぜ明るく闘えるのか」と言われるほど

動労千葉は毎年、明るく闘っている。(俺鉄2 p166)

なぜ

- ①展望をもっているから明るい。
- ②不当や扱いをうけた怒りやくやしさを持っている。
「今に見てやがれ」とみんな思っている。

だから

「俺たち動労千葉は**団結**して闘っているから、

執行部が妥結に踏み切った最終的な判断は、この先闘って展望があるのかということだった。だが当時ぼくがよく主張したのは「展望なんて最初からあるわけねーだろ」「展望はみんなが結束して闘いを前進させる中でこそ生まれてくるのであって展望はわれわれが作っていくんだ」

(佐藤芳夫『生涯一労働者』)



今こういう時代に俺たちは**誇り**をもって生きてるぞ！」

と実感をもっている。